



双葉新書

麻雀放浪記(三) 激闘編

阿佐田哲也



麻雀放浪記 (三) 激闘編

(検印廃止)

双葉新書 380円

昭和46年9月10日 初版発行
昭和48年6月10日 改訂19版発行

著者 阿^あ佐^さ田^だ哲^{てつ}也^や

発行者 瀬川雄章

発行所 株式会社 双葉社

東京都新宿区神楽坂1の8

(郵便番号 162)

電話東京 (268)5111(代表)

振替 東京 117299

印刷所 三晃印刷株式会社

東京都新宿区水道町29

製本所 株式会社 川島製本所

落丁乱丁の場合は本社にてお取りかえします

0293—600059—7336

麻雀放浪記
(三)

激闘編

阿佐田哲也



双葉新書, FUTABASHA

目次

銀座の雀鬼	5
土曜の朝から	22
ドサ健登場	40
殺し打ち	58
就職	67
社長野郎	84
源平勝負	101
接待麻雀	126

花
と
牌

144

決
戦

161

餌
食

187

終
点

205

装幀
秋野卓美

銀座の雀鬼

一

考えてみると、いや、考えてみなくたって、敗戦直後の十六歳のときから丸七年間、べたろくに麻雀ばかり打っていたことになる。

雀歴七年の雀士といえ、今では掃いて捨てるほどいるだろうけれど、七年は七年でも私のは、住む家も持たず、女房子も作らず、寝ては夢起きてはうつつ幻の、降っても照っても牌に命をすりへらすだけで、他のことは何もやらなかったのだから、馬鹿な話であるが、馬鹿馬鹿しすぎるところに今考えても捨て難い味がないでもない。

い。

世間は、すでにブラック小屋の時代から本建築の時代に移っていた。駅前の闇市のようなものは次第にとり払われ、代ってベニヤ仕立てではあるが、マーケットというものが出現していた。闇市に蛸集していた職業不明の兄ちゃんや復員服の呆けた中年男はどこへ行ったか、ばたっと姿を消してしまった。

私は今でも思い出す。数カ月寄宿していた麻雀クラブの表通りの露店に、細々と芋飴を並べていた爺さんが居た。爺さんは陽焼けした頭から真っ黒い汗を流し、自分の店などそっちのけで、通りのどこかで面白い悶着がおきないかと絶えず気を配っていた。自転車が子供を転がしたといっってはそこへ飛び走っていき、掏摸が出たといっっては見物に走った。そうして飄逸な大きい笑い声をたてた。

ああいう表情は、もはやどこにも見当らない。高層ビルこそ建たなかったが、あそこにもここにも会社という奴ができた。無数の会社は無数の勤め人を生み、彼等は

黒っぽい洋服を着て、暗い表情で電車に乗っていた。当今の大企業サラリーマンはそれなりに楽しそうだが、当時は全体にまだ会社の規模が小さかったせいもある。

もっとも私に、他人をあげつらう資格はない。私は世間の枠の外に居た。博打うちの境遇に出世も変化もあるわけではないので、したがって最初と同じく、獣の生活と等しい状態だった。

当時、私は黒シャツを一枚、ボロボロの中学ズボンがひとつ、下着もパンツも一枚ずつ持っていた。つまり着たきり雀だったわけだ。洗濯や入浴という習慣がなかったので、着衣も身体も泥々であった。冬も夏もそれでおしていたから、自分ではそれほど気にならなかったが、異臭ぶんぶんたる有様だったにちがいない。なにしろ、雀荘で仮寝する夜以外は、道路や山手線の車中で寝ていたのだ。

私は、並みのサラリーマンの月給分ぐらいの収益を、ひと晩の博打であげていた。そしてそういう金は、翌る日を待たずして綺麗さっぱり出ていってしまうのが常だ

った。経験のない人にはわからないだろうが、浮浪者の暮らしというものは、案外とお金がかかるものだ。

ある朝、山手線で眠っていたら、誰かに揺り起こされた。

「——君、——君」

私の本名が呼ばれていた。眼をあげてみると、小学校時代の担任教師がすぐ前に立っていた。

「——君だろう」

私は思わず立ちあがって席をゆずろうとした。

「いやそうじゃない、いいんだ、坐ってなさい」

「先生掛けてください、僕はもう眠りましたから」

「元気でいるかね」

黒シャツと中学ズボンとチビた下駄の、異様な私を眺めながら、教師は鼻をヒクヒクさせた。

私と教師はそれから二、三の会話を交した。つまり、

それは私の生活態度に関する話であった。教師は暗に市民社会の中で生きることを奨めてくれ、どういふわけか石鹼会社に就職の世話をしてもいいとまでいった。

私は博打以外のことは金輪際やるまいと思っていたから、笑ってきいていたが、しかしそのことは印象に残った。

というのは、当時、私にとっては唯一の商売道具である右腕が、肘関節から肩にかけて強烈に痛んで上にもあがらないほどだった。牌をツモリ、打ちついたりすると、木綿針で射抜かれたような激痛が走る。つい気合をそがれ、左手を使ったりするが、麻雀は、気で左右されることが多いので、どうも本調子にならない。

第一、両手が激しく動かせないのでは、魔術いふまじが使えない。

獣の生活は、身体だけが財産である。身体が利かなくなれば、あとは餓え死するだけだ。私は無論、医者に行こうとはしなかったが、ある麻雀クラブのメンバーに、トードイという仇名の医者のおがいた。

ある夜、トードイと焼酎を呑んだ。彼は私の右腕をいい加減にさすり、冗談のようにいった。

「ふうむ、肘関節内軟骨剥離だな。そうだ、きつとそう

だよ」

「なんだい、そりゃ」

「関節と関節の間にクッションの役目をする蒟蒻こんやく状のものがあんだが、腕を極端に使いすぎたりするとクッションが破れて周囲にはみ出す。これが硬くなって軟骨みたいなものになると腕を動かすたびに神経にさわるんだ。ほら、プロ野球の投手が肘を痛めたりする、あれだよ」

「だが俺は投手じゃない」

「麻雀の打ちすぎだろ」とトードイは酔っていて苦もなくいった。

「放つときゃ、なおるかね」

「手術して軟骨をとりゃいい。それでもクッションがない状態なんだから烈しくは使えないがね」

一一

TS会から金を借りた。

T S会というのは無論でたらの名前で、怖くて本当の名前は書けない。誰にでもお金を貸してくれる地下組織のことだ。

私は以前、ボン中毒時代に新宿の愚連隊の麻雀の助っ人になったことが一度あるきりで、正業であろうと虚業であろうと集団に加わることはもちろん、関係を持つことも避けてきた。

集団という奴は、どうも性に合わない。勝負事は結局、一対一のものだと思う。一人きりで生きるなんてことは、原始的で、不便で、間尺に合わないことにはちがいないが、しかし又一方で、きわめて理想的なものである。その頃の私はこう考えてできるだけ獣のような生きざまをしようとしていた。

この私の考えは半分効なくて、本当の孤立とは単純に社会に背を向けることではない筈だが、いかに幼なくとも当時の私が一人きりで生きていた以上、誰にも笑う権利はない。私は獅子のように道ばたに寝、獅子のように他人を喰い殺そうとしていた。

金は貸し借りするものではなく、奪い奪われるものと考えていた。

その私がT S会から金を借りたのだ。右腕の激痛が、気を弱くさせていたにちがいないが、金を借りてしまえばただの無頼漢。

そうはいっても、ひどくうまい話があったのだ。

女のカモが居るといふ。そのカモに又大ガモがついていて、つまり女のパバのことらしいが、自由ヶ丘の、その妾宅にさえ入りこめば、潮干狩りでもするぐあいに、えっさえっさとお金がとれるという。

話を持ってきてくれたのは、コード安というキャバレーのボーイだった。

「行くかね——」とコード安がいった。

私は頷いた。今の私の調子では、女をカモるぐらいがせいぜいのところだろう。

「ただね、一人で行かなきゃ相手にしてくれないぜ。先方はコンビ打ちにやつつけられた苦い経験があるんだ。なにしろ、クマ五郎（商売人）が皆眼をつけてるんだか

らな。近頃はいくらか向こうも眼が肥えてるぜ」

「その点は大丈夫さ。これでね——」と私は右腕を振ってみせた。「仕事ができねえんだ。地で打つより仕方ない」

「きいたよ。さっぱりだったな。まあうまくやって、ゲンを直しなよ」

「恩に着るよ」

「それからな、その服装だ」

「わかってるさ」

私は笑って見せた。

しかし口でいうほど、恩に着ていたわけじゃない。TS会の金は、鳥がカアと鳴くと一割ずつ利息をとられるという一日一割の鳥金。コード安への礼金も馬鹿にならない。TS会への返金がおくれて消されていく犯罪者たちが無数に居る。

私は雀荘のマスターに泣きこんで、息子の洋服を借り、床屋に行きなどして、西銀座のコード安の店に出かけた。

頃合いをはかって、つまり十時半をすこし廻った頃、店に入り、春美という女を指名した。そういう約束になっていたからだ、早くからいってこんなところで金を使っていたつまらない。

「——いらっしゃい」

白地に派手な柄を浮かした和服の若い女が横にすわった。日本調の美人だったが、私はほとんど顔も眺めなかった。緊張していたからだ。

踊りましよう、と女がいい、踊れない、と私は答えた。

「いいでしょ。女に恥をかかすものじゃないわよ」
本当に踊れないんだ、と私はいうより仕方がなかった。

「何を考えてるの」

「麻雀のことさ——」

女は不思議そうに私を眺めた。

「麻雀の、どんなこと？」

「そうだな、たとえば、ツクようにさ」

「祈ってるの？」

「ああ、以前はそんなこと考えもしなかったけどね。この頃は駄目だ。それに、麻雀はやるが、俺は金持ちじゃない」

「あらそう、お金持ちはあたしも嫌いよ」

「しかし金持ちがいるせいで君たちは喰っていけるんだろ」

「ええ。女からいわせれば、男の人は誰も彼もお金持ちであって欲しいわ。でもお金持ちと一緒に暮らすのは嫌い。ぞっとする。一緒に暮らすのはお金のない人でなきゃ」

途中で気がついたのだが、女の声は低くやさしくてバンドの音でともすれば消されがちなほどだった。

ふと、情意を湧かして、女の顔を見た。

厚化粧だった。声に似合わず平凡な美人で、銀座に來ればさらに居るだろうという感じがした。

「君は、いつも負けるそうだな」

「麻雀——？」女はうすく笑った。「病氣ね。弱い」

よ。いつもひいひい泣かされちゃう。この店の持主の鎌ちゃん、今夜もやりにくるけど、あたしがこの店で貰うギャラの十倍は、毎月とられるわ」

「負けて面白いかい」

「勝負事は負けてるときが面白いんじゃないの」

「いい御身分だな」

「ほんとね、いい御身分だわ。療養所の親父さんには送金できないし、弟の学費も出せなくて途中で学校やめちゃった。なンのために働いてるかわからない。みんな麻雀のためよ。でもそれでもどうにか生きてられるんだから、まったくいい御身分ね」

いつのまにかバンドが螢の光を演奏していた。支度してくるから鎌ちゃんの車で行きましょうと女は立ちあがった。

まもなく店の前に大きな乗用車がとまり、瘦せぎすな三十男が、春美と並んだ私の方へ笑いかけた。

三

最初は上々の出来であった。打ちだしてみると、コイダ安の言葉はまったく不正確で、女の麻雀は決して筋が悪くはなかった。

彼女のババで、どこかの会社の社長だという小でつぶりしたチョビ髭老人も、雀歴二十年だとか、これは平凡な守り麻雀だがすくなくとも暴牌は振らない。

もう一人、車を運転してきたマスターの鎌田一邦、これは春美の言によれば、銀座で彼と打つ者はほとんど無く、近頃は銀座以外でも敬遠されて競馬ばかりやっているといる。

そしてそう聞かなくても、彼の力量はすぐに私にもわかった。痩せて小柄で、見た眼の威圧感はないが、銀座の空気を吸って育った男の持つ俊敏さと細かい神経がある。

しかし甘くないメンバーということが、この場合、私

に逆に幸いしたようだ。地（インチキを使わず普通に打つこと）で打つよりない私にとって、正攻法の麻雀を打つには、相手もセオリーに沿った打ち手である方がやりいのである。

一チャン目、二チャン目、小さくきわどいトップだったが二連勝した。

三チャン目の東三局だった。

上家の鎌ちゃんが親で、五巡目まで、こんな捨牌をしていた。



ここで穴五索を、彼は喰い、 を捨てた。



それから続いて を手から出し、 をツモ切りした。

私は を切って、ドンシと鎌ちゃんにぶつけてしまった。

「あっ——！」と私は叫んだ。



彼の手はこうで、その頃流行しはじめていた芸者牌（ドラ牌）がであつたため、親マンであつた。

しかし、私は、手の大きさに驚いたわけではない。

「この、打ちは凄いい。まいりました」

へへへ——、と鎌ちゃんは細い眼を糸のようにして笑つた。

私はまったく、彼の手を読み誤まつていたのだ。三色、乃至は通貫形で、連チャンをもくろんだものと思つていた。

何故といつて、が二巡前に捨てられている。

とあつて、でもでも喰いたい手なら、こう手を定めない。そのうえ、と切りだしている。どう見ても、という形にこだわったとしか見えない。では駄目で、でなければならぬのなら（通貫形がからんでいるとしても）ドラ二

丁もあるホンイチ手ではない。

しかし考えてみると、ドラがだけには出にくい。前述の効果を狙って穴三索を放棄し、穴五索に固定するという手は、ケレンのように見えて理詰めなのである。

私は吐息をついた。派手なプレーではないが、この打ちの巧みさ、奴の思考の鋭さ。こうした麻雀で思考力、認識力で水をあけられることは致命的なのである。こんなぼんくらが、烏金を持って打っているのだ。

続く一本場、今度は七巡目で、鎌ちゃんがリーチをかけてきた。



芸者牌はだ。私はぐっと腹に力を入れて奴の捨牌を眺めた。



こうした場合、万全のセオリイは落しなのであ

る。**發**を三枚おとして手の巾を拡げ、遠廻りしながらじっくり手を作っていく。

だがその戦法はとらなかつた。直前に、一本とられて気負っていたこともある。絶対安全策よりも相手の手を読んで、思考力で打ち克つていきたい。

それもあつたが、作戦奏効した親がツキだす感じは濃厚、それを考えれば持久戦にもちこめない。ストリートに対抗していつてツモられるのを防がねばならぬ。

私は敵の捨牌のうち、二巡目の**四四**に眼をつけた。序盤のこうした中張牌打ちは、大概はその付近、及び索子テンパイになるおそれがあつて、カモフラージュのために早捨てされる性質のものだ。

従がつて、索子は捨てられない。しかし、この場合、ドラが**四四**なのだ。**四四**。乃至、**四四****四四****四四****四四**とあつて、**四四**を早捨てするだろうか。あとで**四四**を手から二丁切りしている。前述の形なら当然、**四四**を先におとすだろう。

私の手の中の形から見て、二五八筒は切れない。万子

もソバテンがないという保証はない。

四四は春美も一丁切っている。五八索待ちはまずなかろうし、二五索待ちはワンチャンス。切るなら索子ではないか。

私は**四四**を切った。次に**四四**を切った。

まず安全な**四四**からではないかという人は初級クラスで、このメンツをおとす以上、どちらから切っても同じこと。春美が万一リーチをかけてきた場合、ここにも安全な**四四**を残すのは当然の話だ。

だが、鎌ちゃんの待ちは二五索だった。



上げ汐の親で、今度は敵はストリートに最短距離で来たのだ。私はくると卓に背を向けて、痛む右腕をさすりながら唇をかんだ。

それから、勝負のついたあとの自分の手をめったに見せたことのない私が、手を開いて、

「マスター、貴方ならどれを捨てますか」

鎌ちゃんはじつと私の手をみつめた。
やがて彼はいった。

「——私もそれでしょう」

そして又こうもつけ加えた。

「私がお宅だったらやっぱり放銃していましたよ。おかしいですな、勝負って奴は、いったいどこに欠陥があって、こう差がついてしまうんでしょう——」

四

自分の身体の周辺に、急に寒い風が吹きつゝのつてきた。

一度目が親マン、二度目がリーチドラーで三千九百、二局続けて親の鎌ちゃんに打ちこんだ。私の点棒箱は寥寥たる有様になったが、そのことがピンチの理由ではない。

点棒だけの問題ならば、その前二連勝していたし、まだ充分余裕はあったのだ。二局続けての完敗で、この辺

が運の替り目のような気がしたからだ。運が離れてしまえば、点棒などいくらあっても追いつかない。

麻雀をひととおり打つ人なら誰でも承知してしよう。

運が離れるきつかけがあつて、そのところでは誰でもが、運をもぎ千切られないように、力いっぱい努力工夫をこらすのだ。それでも十中八九までは、運に見放されてしまう。

今、並みの手作りをしていたら、たとえよい手になったところで、一歩おくれのお兄おにイさんだ。私が二向リサンヤン聴ならテキは一向聴、私が一向聴ならテキはテンパイ、私がテンパイなら、テキはアガリだ。

花札でいう泣き目（七ケン）、ポーカーでいうツウベア地獄、もうひと息のところでは勝負負けするのは眼に見えている。

当然、私の打法が、ここで変わる筈であつた。
次の配牌が、私の眼の前に揃つた。



私は、その手からしばらく眼が放せなかった。

これは、神の試練だ。

鎌ちゃんの山からとった配牌だったが、仕込みとは思わなかった。奴が、こんな、他者のところへそっくり流れこむような甘い仕事をするわけがない。偶然に來た手なのだ。

これが神の試練でなくてなんであろう。今、私は、並みの手作りをしていたら必ず敗れる瀬戸際にいるのだ。離れようとする運を握り直さなくてはならないところなのだ。

手に溺れるな、恥も外聞もなく、早い手を作ってひたすらアガれ。お前は一手おくれなのだ。この眼に見えないピンチを乗り切るためには、安かろうと何だろうと、全速力で棒テン（ストレートなテンパイ）をする以外はない。それでなくては他者の手に追いつけない。

第一ツモ、が来てを切った。が來たと
き、ためらわず、私はを切った。そのはすぐにかぶったが、私は平氣だった。こんなときに理想的な手

でアガれる筈はない。役満までの手は入っているが、大三元にすれば一歩おくれになるのだ。

スポッとが入ってきて、を切った。



ホインチにする気はすこしもなかったのかぶったを惜しいとは思わなかった。私は、白発中のいづれかひとつでもできれば、ボンして、残りの三元牌の一種類を二丁切りしていこうと思っていたのだ。

かりにをボンするとする。そしてを二丁切りするとしよう。そうなれば、たとえ初牌でも、私に対しては、誰もは警戒しないだろう。がついていれば、を二丁おとす奴はいない。そこを利用してアガる。いかに大物がついたとてアガらないのではなんにもならない。特に今はそうなのだ。

だが、何巡まわっても、ももも、何もできやしなかった。私の手はが入り、こうなっていた。